

「平和・共存」に関する教材の開発に向けて —— ドイツの負の遺産に学ぶ

広島県立賀茂高等学校 教諭 松島 浩司

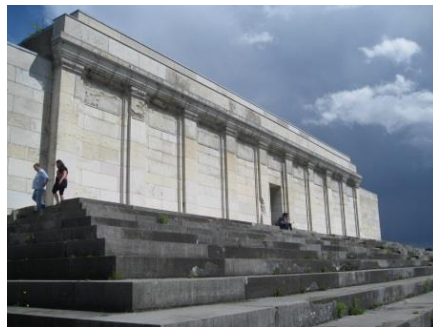
1 はじめに

私は8年前、当時勤務していた高校でESDに出会い、現任校がユネスコスクールということで、赴任した昨年度以来現任校でのESDに関わってきた。現在、当校では「総合的な学習の時間」をGlocal Action Program とし、高等学校1・2学年においてESDを基底に据えた「地域課題発見・解決型学習」を実施している。これは昨年度末にカリキュラムを開発し、本年度実践検証しているところであるが、さらなるカリキュラムの改善に向け、ヒロシマに生まれ育つ者として、「平和と共存（＝人間の尊重、多様性の尊重、非排他性）」に関するカリキュラム開発の必要性を感じた。

なぜ人々はヒトラーの台頭を許したのか、何が人々をユダヤ人虐殺という狂気に駆り立てたのか。そしてその過去の歴史が現在ドイツの「平和と共存」にどのようにつながっているのか。これを直接肌で感じたいという思いから、今回のESD研修旅行に参加することとした。

2 ドイツの「負の遺産」を巡る

ニュルンベルクのドク・ツェントルムでは1929年以降のナチスの台頭から1945年の終戦までの記録、ナチス党大会、ニュルンベルク法の制定過程、ユダヤ人の証言、反ユダヤ主義のポスター、そして戦後のニュルンベルク裁判までの歴史を、英語のガイドを聞きながら知ることができた。特に印象的だったのは、ナチスの巧妙なプロパガンダや演出である。これによりナチス党は1932年の選挙で第一党となり、合法的にヒトラー内閣が成立したのである。ナチス党大会会場跡に立ってみて、改めてその規模の大きさに驚愕した。しかし、果たしてドイツ国民はナチスのプロパガンダに「騙された」のだろうか。



第一次大戦での敗戦と莫大な賠償金，世界恐慌，ドイツ経済の破たん，生活の困窮。この「負の連鎖」の中で，少数政党のひとつにすぎなかったナチ党が，ヒトラーの巧みな弁舌とプロパガンダにより国民を扇動していった。彼らは「敵」を作ることによって国民の感情を煽り，国民を支配していったのではないだろうか。

ダッハウ強制収容所はナチスの強制収容所の中で最も古いとも言われている。1933 年に設置後，ユダヤ人の強制収容が本格化したのは第二次世界大戦が始まってからである。当初は共産主義者，社会民主主義者，労働組合員，政治家，ジプシー，同性愛者が投獄され，強制労働，人体実験，拷問の末，処刑された。ダッハウ強制収容所における毒ガスの使用については賛否両論あるが，ここでの惨状については枚挙にいとまがない。ダッハウ強制収容所の中でも，焼却場は大変な衝撃であった。この焼却炉で何万人もの遺体が焼かれた。このようなことがまるで工場の流れ作業のように行われたのか。改めて戦争の恐ろしさを感じた。



3 研修旅行を終えて

今回の研修旅行では，戦争の負の遺産を自らの目で見えて，直接触れることができたことが何よりの成果であった。戦後ドイツが難民を多く受け入れていることは，この過去の歴史と繋がりがあ
るのではないだろうか。これについては，これから研究していきたいところである。



戦後 70 年を過ぎ，ドイツでも日本でも，戦争が「歴史上の 1 ページ」になりつつある。一方，世界中で紛争，テロ，難民の流入など，世界は多くの問題を抱えている。これらをどのようにして，生徒たちに「自分ごと」と捉えさせるのか。また，感情だけで判断するのではなく，何が人間を戦争の狂気に走らせるのかということについて，その背景を理解し，多面的に考えさせるにはどのような教材を開発するべきか。私は英語教育が専門であるので，社会科の担当者とともに，来年度に向けて教材開発を行いたい。